

## 夏より秋へ：短歌

著者	富永，雄載
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 2
ページ	1 2 9 - 1 3 0
発行年	1916-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6678">http://hdl.handle.net/2298/6678</a>

## 夏より秋へ

三、三、 富 永 雄 載

試験了へて夏草の上に下り立てば行く雲白し風やはらかし  
西風に烈しくありともあをを日々に伸びゆく新芽うれしも  
月影は松の葉越しにこぼれきて小簾吹きかへす風のすししさ  
海風に詩集のページはためきて人影見ぬ別荘のひる  
すゝ風は海原遠く走りきて白きゆかたの襟を吹くかな  
旅人は眞夏の雲を打仰ぎひろ野の果ての町おもひけり  
乗合の人影へりて並木路をぬひ行く馬車に夕日さすかな  
一管の筆たづさへて草まぐら身を行く雲にまかせてしがな  
蚊帳越しの電燈くらし薬の香高き枕に涙ながれぬ

(以下病床にて)

病床のつめたき胸ににじみくる紅き灯よビールの泡よ  
病みぬれば若き命も糸のごと細き望みに生くるかなしさ  
千萬里たゞ一息にかけり行く夢さめ果し病床あはれ  
かすかなる羽音を立てゝ病床の灯をめぐりつゝ闇に消えし蚊  
長病の胸を囁ひなりめしうぐの睡く息のごと青き喪襟

下宿屋に病む身は若しコノ世の疾く得ることに涙するかな  
眼とづれば寮顔にどよむ寄宿舎の樂しき一夜思ひ出にけり  
物皆を灰色に染めよゆく秋のつゝむにあまる胸の愁よ  
心よく浴槽にひたり熊本の友思ふ日よ病癒ねんとす  
水のごと空は晴れたり秋風になびく大旗紅にして  
武夫原の緑をふみて馳せちがう男の子いさまし馬肥ゆる秋  
樂の音の秋晴の空にひゞくとき紅白緑の色きそひゆく  
月清き秋の夜すがら古ローマの哀史讀まじ城跡にして

(以下運動會の歌)

## 秋のさけび

二三、甲二 有 田 俠 花

默々たる大阿蘇は大なる自然の歌への神である。不平になやむ若人は阿蘇の雄姿を仰げ。悲觀に生きぬられぬ若人は噴火  
口壁にたて。

狂はしき心しきりに叫びつゝ渦巻くけむりに石なげて見よ。  
何事も大あそのけむりに秘めこめて世の謎とせむねぎなりしかな。  
古さとの人等の蔑し目つめたさに旅にやすらふ姿さびしも。  
義理は強しおそろしき力やすくと男一匹死など思はす。